

かしば見聞録

●タウンウォッチャー発信●



旗尾池から二上山を望む

記・紀にみる香芝

タウンウォッチャー 矢野達生(関屋北)

古事記や日本書紀には、すぐれた歌謡が数多く採録されています。古く歌は音楽や身振り手振りを伴って歌われたもので、これを歌謡といえます。人々の共通の観念や感情を基とした、明るい素朴なものでした。やがて集団から個人の内面を見つめた歌が詠まれるようになり、和歌として独自に発展していきました。古事記や日本書紀に採録された歌謡の中から、香芝の地に関わりのあるもの三首をご紹介します。思います。

日本書紀卷第五宗神天皇十年九月の条に「三輪山の神大物主神の妻、倭迹迹日百襲姫命を、菅壘に葬ったいきさつと菅壘築造のありさまを次のように述べています。

是の墓は、日は人作り、夜は神作る。故大坂山の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまで、人民相踵ぎて手運びにして運ぶ。時人、歌して曰く、

大坂に 継ぎ登れる 石群を 手運びに越さば 越しかてむかも

(大坂山の麓から頂まで連なる多くの石だが、手渡しにして運んだなら、運びことができるだろ(よ))

いじいじ大坂山は、二上山あるいは

二上山周辺の山とされています。橿原考古学研究所の調査によると、中山大塚古墳の石室の石材は、二上山西側の春日山の輝石安山岩、下池山古墳の石室の石材は二上山北側の芝山のカンラン石安山岩であることが分かりました。春日山の石は穴虫から逢坂辺りを通り、芝山の石は関屋峠を越えて、穴虫、逢坂を経て今の天理市柳本へと運ばれたのでしようか。いずれにしても、石は二上山周辺から、香芝市内を通って、女王卑弥呼が眠っているかもしれない大和古墳群の現場へと運ばれたのは確かなこととでありましょう。

大坂に 遇ふや少女を 道問へば 直には告らず 当摩杵を告る

(大坂で遇った少女に大和への道を探ねると、大和へまっすぐにいく道を告げないでこの道は危険だからと遠まわりの当摩道を教えてくれたよ)

この歌は、仁徳天皇が崩御したあと、未だ皇太子として難波宮にいた後の履中天皇が、難をさけて大和へ逃れる途中、二上山の麓のあたりで出会った少女の機転で助けられたことに感謝して詠んだ歌とされています。大阪府太子町から香芝市穴虫に抜ける道をさけて、竹内峠へと、遠回りをして大和へと逃れた様子が理解できます。日本書紀卷第十

二履中天皇即位前紀と、古事記下の巻墨江中王の反乱の条に採録されています。

日本書紀卷第二十二推古天皇二十二年十二月、太子と飢者の条には、聖徳太子が片岡にお出かけになったとき、飢えた人が道端に倒れていた。太子はこの様をご覧になって飲物と食物を与えられた。そうして衣服を脱いで、飢えた人に掛けてやり、安らかに寝ていよと仰せられた。

しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その田人あはれ 親無しに 汝生りけめや さす竹の 君はや無き 飯に飢て 臥せる その田人あはれ

(片岡山で、飯に飢えて伏せている、その農夫よああ。親もなしにお前は生れて来たわけではあるまい。主君はいないのか。飯に飢えて伏せているその農夫よああ)

片岡山について「大和志」は葛下郡片岡荘今泉村(現在の香芝市今泉)としています。その地点は、今、王寺町の達摩寺とされていますが、太子が斑鳩から河内の磯長に通われた道筋のどこかであり、今話題の尼寺廃寺のあたりか、清水湧く今泉の地であったかもしれないとひそかに思っております。